（参考資料）

第１回部会における主な意見

テーマ１　地域住民をはじめ、大学や地域企業など多様な主体が地域活動に参加しやすくなるきっかけや担い手を増やす仕組みづくり

【仕組みづくりのための取組の方向性】

１　居心地がよい「場」の創出が必要ではないか

○　地方から出てきている学生は、その活動を居場所としてつながりを求めているという背景があるのか、活動が続いているように感じる。（宇野委員）

○　学生を受け入れる町内会側にも「一緒にやろう、一緒に考えよう」というスタンスでいてもらうことが大事。（森本（陽）委員）

○　おやじの会主催のキャンプについて、企画や運営まで全て学生に任せており、学科やサークル特有のプログラムを組み込んでもらうことで、学生の得意なことを活かしてもらうようにしている。（中本部会長）

○　学生自身も自分の専門分野を活かしてボランティアをしたいという思いは持っていると感じる。（中本部会長）

○　参加者にとって、自分達がやったことに対して「ありがとう」「一緒に出来て良かった」と声をかけてもらうことが達成感になり、次につながっていくはず。（森本（陽）委員）

○　地域の一員として責任を感じながら関わることで、無償であっても、やりがいにつながるのではないか。（前田副会長）

２　多様な主体が交わる仕掛けが必要ではないか

○　地域活動に関わりたいと思っている人と、地域団体との間にはギャップはあると思う。（河合委員）

○　活動をする上では地域への関心の有無がすごく大きいと感じている。（森本（陽）委員）

○　行政がボランティアの説明会の企画や、ＮＰＯや町内会のマッチングの場を設けてくれるとありがたい。（宇野委員）

○　アンケートの中で、「十分な情報がない」という意見も多かったので、地域団体と学生など、対面でのマッチングの場があると、より活動につながっていきやすいのではないか。（宇野委員）

○　一度地域活動に関わってもらえれば楽しいと思ってもらえるはず。（尾崎委員）

３　地域企業、大学等との連携強化

○　学生として地域活動を行う中で、大人・学生・子どもと分けて考えられることが多く、大学生も「大人」として扱ってほしいと感じることがある。（森本（陽）委員）

○　地域活動への関わり方について、地域団体と学生との意思疎通をしっかり取ることで、学生の活動への継続性も上がるのではないか。（森本（陽）委員）

○　地蔵盆などのイベントなどで企画からやらせてほしいと考えている学生がいれば、地域団体側も思い切って全て任せてみるという心意気が大事なのではないか。（河合委員）

○　同じ大学の学生でも学科が違うと全く関わりがないようで、活動を通じて初めて交流が生まれている。（中本部会長）

○　単発的にイベントに人手として出てもらいたいと望まれることがある点については、地域企

業に対しても学生に対しても同じなのかもしれない。（河合委員）

○　地域企業や学生のそれぞれの目的が、交流することで達成されるような機会や場があったらよいのではないか（例：地域の祭りに手伝いに来た学生が出店企業を訪問）。（宇野委員）

○　学生と地域企業の地域活動に対する目的や考え方は、違うところもあるかもしれないが、地域団体側の思いと、企業や大学などとのマッチングについては、「仕掛け」や「連携強化」といった部分でもう少し考えていくべきところ。（前田副会長）

４　その他

○　活動を継続することで、経験を積み重ねることもできるし、成長を感じてもらえたら嬉しい。（宇野委員）

○　地域の中で育った恩返しとして、地域に関わり続けたいと思い、学生団体として活動している。（森本（陽）委員）

○　ボランティアセンターは直接行かないと情報を得られないので、広報板など、普段歩いている時に目に止まるツールの方が地域活動に興味を持つきっかけになると思う。（森本（陽）委員）

○　個人（大学生）としての関わりか、組織（学科、サークル）としての関わりかによって、地域活動継続の担保感が違うと思う。（河合委員）

○　ボランティア活動は専門性を活かすこともできるし、同じ属性以外の方と関わることもできる。（前田副会長）

テーマ２　活動見直しやデジタル活用、負担軽減策など、持続可能な地域コミュニティに向けた仕組みづくり

【仕組みづくりのための取組の方向性】

１　参加へのハードルを下げる（学生・外国籍の方等）

○　雲ヶ畑地域では、京都大学のサークルと一緒に山仕事の活動をしている。学生は４年で卒業するが、活動が引き継がれることで、学生たちが主体となって活動発表会を兼ねた行事「森の文化祭」は２１回続いている。地域住民が山仕事を指導しており、地域と学生が連携して取り組んでいる好事例と考えている。（岩井委員）

○　学生が主体的に活動したいことに地域が協力する形であれば上手くいくと思う。（岩井委員）

○　教授が地域に学生を連れてくるケースがあるが、強制的な活動になる場合は、なかなか継続しない。（荒川委員）

○　外国籍の方など、いろいろな人が参加してくれることで前向きな議論ができるはず。（丹治委員）

２　新たな担い手との関係構築（これまでのやり方の刷新）

○　ＬＩＮＥやメールの利用をあまり高齢の方に強制することはできないが、全員が理解するまで待っていたらデジタル化は難しい。（丹治委員）

○　大学生など若い世代から教えてもらえるような研修会が月に１回でもあればよいと思う。（丹治委員）

○　自主防災会がデジタルを活用しているところもあるが、なかなか広がっておらず、理由はじっくりと教えてくれる人がいないからであり、やはりコミュニケーションが大事と思う。（丹治委員）

○　基本は対面での会話によるコミュニケーションが大事。人を知ったり、人を好きになったりするためには、実際に会話することが必要ではないか。（岩井委員）

○　今の学生の多くは、ぶつかることや間違うことを恐れている学生が多い印象なので、学生こそ、リアルな場でコミュニケーションをとる必要があるように感じる。（行元委員）

○　近隣の高校とも連携を深めており、商店街の販促ツールなどを一緒に企画して上手く進んでいる。（丹治委員）

３　地域自らが変わっていく仕掛け

○　長期的なつながりをつくるためには、ファンをつくることが大切であると感じた。（玉村部会長）

○　地域内の魅力発信として、自治連合会公式インスタグラムを運用しており、例えば、昔重要な施設であったが今は使われていない農業用水のため池の弁天様を地域活性化の新しい起点とするため、由来などの情報を自治連合会から発信したり、学区内にあるカフェや保育専門学校の方が「＃樫原学区」を付けて発信してもらったり、若者が関心を持つようなツールで情報発信している。（野村委員）

○　自治連合会の活動を通して、各種団体の方が少しずつデジタルを活用し始めたり、自治会加入者が増える自治会があったりと、効果が出ている。

　地域には、自治会の加入方法や児童館の利用方法が分からないが、わざわざ区役所に聞きに行くのは面倒と感じている方もいるので、そういった方に向けてインスタグラムなどで情報発信していけば、地域の魅力にも気づいてもらえるはず。（野村委員）

○　ずっと同じ活動ばかりでは面白くならないと思う。（野村委員）

４　その他

○　スマホ講座を開催した際、一定数の参加者があるので、必要と感じている方は増えていると感じている。（荒川委員）

○　高齢の方から、孫と寿司を食べに行きたいので、アプリの使い方を教えて欲しいと頼まれたことがあったが、その方にとっては、孫と食事に行くことがデジタルの第一歩になり、今ではＬＩＮＥも利用されている。（野村委員）

○　コミュニケーションも大切だと思うので、デジタルへの移行期間においては、効率性だけで評価しないことも重要ではないか。（行元委員）

○　デジタル化を進めるためには、デジタル化を進めるリーダーが地域の方にどれだけ辛抱強く説明できるかにかかってくる。（丹治委員）